

あれは私が十六の頃で六月と七月の狭間だった。初夏の暮れで次第に風は乾いていき、ぶどうの蔓は八月の実りのためにたっぷりと雨水を吸い上げ、太陽は日増しに光を強める。白く輝く真夏が訪れようとしていた。

一九一四年の六月二十八日の日曜は地球の端から端までお祭り騒ぎだった。ドイツのカイザーはバルト海でヨットレース、オーストリアの皇太子は新皇太子妃のお披露目のためセルビアを訪れていた。

私はと言えば王侯貴族の夜会やら茶会やらかるた会をよそに学校の授業でぐっすり寝込み、教壇の前に立たされてさんざ叱りつけられ、さらにはその教師の物言いがどうにも癪に障ったので腹いせ紛れに放課後友人たちと黒板に不埒な落書きを一面にしている所を、上層の教師に見えられ総出で尻を蹴飛ばされていたのだった。

私の六月二十八日はそうして終わった。このアメリカのみならず、どこの国のお人も今日のうちに皇太子夫妻が殺されるなどは夢にも思わなかった。ましてやたった一六歳の少年だった私に、どうして未来のことなどわかるうか。

サラエボの事件の事を知ったのは少しばかり後のことで私はたまたま学校が休みなのをいいことに、昼まで寝ていたのだった。昼過ぎあたりに目を覚ますと私は何の気もなしに町の公園に行ってみようかな、と思いついた。むろん大した目的もなかったのだが、もしかしたら新聞売りのアルバイトをしている同級のアレック・バルダーソンがいるかもしれないと目論んだのだ。この跳ね回るように楽し気な名前の後に重厚で長々とした名字の続く

彼は、閉じることのない口、立ち止まることのない脚を持つ、まるで通りを駆け回る無邪気な五歳児を体だけ大きくしたような少年だった。楽しければ惜しげもなく白い歯並みを見せ、怒ればとことん怒り、悲報を耳にすればわんわん泣いた。こんな風に子供っぽいのにどこか詩人の氣質があつて野端のみすぼらしい花も、遠くの麦打つ単調な音も、彼の耳と目と心に触れればたちまちミレーやマネの絵画の一つとなるのだった。

彼は特に私について語るのが好きだった。私が夕暮れの空のような薔薇色の肌をしていて、イマームのモスクのタイルより鮮やかな青い目を持っていて、角度によって少し違った色をする金髪で、笑うと両頬の皮膚が窪むのや、煙草を持った時の指の関節がまたこの上なく気品があるのや、と様々なことを彼は語った。私は彼の詩の主人公になるのが大変気持ちよかった。それは皆同じでよく彼は級友たちに「俺はどうだ」「僕はどんな風だ」と詩的な自分たちへの評価をせがまれていた。

なによりアレックはモテた。誰だって彼を好きになる。日向の似合う人を皆知らず知らずのうちに好きになってしまふ。私もそうだった。無邪気で子供っぽいところ、たくさん食べるところ、金持ち育ちの私になんの差別もしないところ、学業の傍ら仕事をして家計を支える一生懸命なところ。挙げればきりがないほど私はアレックが好きで「友人にするとしたらどんな人がお好みか？」という質問には必ず彼の名前で答えるのだった。

そうして二十九日の午後、新聞でいっばいの肩掛け鞆を下げて大声をあげているアレックにふと訳もなく会いたくなつて私は階下に降りて行った。

玄関口へと長い廊下を進んでいると、うっかり両親がコーヒーを飲んでくつろいでいる居間の前を堂々と通つ

あれは私が十六の頃で

こだま

てしまった。扉が閉まつていけばよいものを、夏のこと
で涼しい空気を入れるために「扉も窓も全開にしてあった
ので、両親はさんざ朝寝坊した挙句ぶらぶら遊びに行こ
うとしている木偶の坊の息子の姿をしつかり御両眼にお
納めなすつたのだ。

「ロバート」と父の重々しい声が私の健やかな両の足
を床に縫い留めた。

「今日すべきことも終えずにどこぞに遊びに出かけよう
とは中々よい心がけではないかね？」

「今日すべきこととはなんです？父さん」

私は引きつった微笑を浮かべ、扉の蝶番のあるあたり
まで歩を進めた。父は脇の小卓に大層丁寧に置かれた新
聞記事の上に手を置いた。

「それ即ち今日の朝刊を読むことだな」

「新聞！」

私は揚揚と手を一度叩いた。

「そいつはいいや！ 丁度これから読みに出かけるとこ
ろだったんですよ！」

「わざわざ外に新聞を読みに行くの？ ここで読めばす
むことじゃなくて？」

私のお調子に乗った声はすぐに母のため息交じりの声
に打ち消された。私はバカみたいな微笑を浮かべたまま
ぼつくり黙ってしまった。母のため息に父のため息が重
なった。

要するにこの二人は私が世界情勢などにはさらさら
興味がなく、大した家の出でもない素行の悪い友人達に
会いに行くのが主目的だと勘づいているのだ。両親はア
レック・バルダーソンやそのほかの友人にあまりいい顔
はしない。何しろ父は複数の鉄工場をまとめ上げる会社
のトップだし、それも叩き上げの成金の二代目だから息

子にはもつと顔の利く友人を持って欲しいというのが本
音だろう。それ故、私の愛すべき友人達は嫌われている
とまでは言わないが、そこそこの扱いはされていない
のだ。

「まあいいですよ。お行きなさい。でもあなたもそろそ
ろ自分の利害が考えられるお年ですからね」

と、母は軽く鼻先で手を振った。利害というならアレ
ックのお母さんはどの誰よりも美味いさくらんぼのパ
イを作れるので母さんよりかはかなり利ですよ、という
文句が舌先まで出かかったがかううじて飲んだ。

外へ出れば天から少し傾き濃い色を放つ太陽に照らさ
れ、街路の木々が赤金に染まっていた。唇に大海を渡つ
てきた風が触れ、口を開けて飲み込んでみればほんの少
し雨の味がした。

ゆつくりと煉瓦の歩道を歩いた。時々足首を白いドレ
スの裾が掠めていく。首を擡げて遠くを見通せば、羽飾
りとたつぷりとしたリボンをあしらった女たちの帽子、
男たちの黒く光るシルクハットが上下に揺れながら動い
ていた。

時代はまさしくベルエポックだった。穏やかで華やい
だ永遠とも思われる日々。

歩道の煉瓦の色が変わったところで私はいつもの公園
に着いている。さあ、アレックはどこだろうとあたりを
見渡してみたが見つからない。なんだか人がいつもより
多いのだ。

ようやく聞き覚えのある鈴の転がす声がしてそちらを
見てみれば、落葉樹の大木の下でのベンチにアレック・バ
ルダーソンが数人の友達と一緒に座っていた。アレック

は私を見つけると元気に手招いた。近づいていくとアレ
ックの桃色に上気した頬と明るくきらきら輝く瞳がすぐ
そばまで寄せられた。

「ロバート」

と、彼は自分の肩掛け鞆を持ち上げて見せた。

「今日はすごいよ」

見てみると彼の鞆はほぼすつからかんだった。いつも
大抵は七部ほど売れ残っているのだが、あの日は皺だら
けのが一部なんとか残っているだけで後は全部売れてし
まっていた。級友の一人がアレックと同じように血のの
ぼつた赤い頬をして私に「読んでみな」と記事を手渡し
た。

「オーストリアハンガリー二重帝国皇太子フランツ・フ
エルディナンド並びに皇太子妃ゾフィー、サラエボにて
死去」

大見出しにはこんなことが書かれていた。どうやら私
が教師に叱られているときか、黒板に落書きしていると
きか、いずれかの間にサラエボの町を車で巡回していた
皇太子夫妻はガブリロ・プリンツィプというセルビア人
青年の銃弾に倒れていたのだ。

ああ、なるほど、やたら新聞が売っていたのはそうい
う訳か。

私は父が何故あれほど朝刊にこだわったのかにも合点
がいった。確かに一国の王位継承者が定職にもつかない
どこぞの不良少年に殺害されたともあれば大騒ぎだろう。
アレックの財布も大喜びのはずだ。

しかし私はアレックの赤い頬も仲間たちの興奮ぶりも
あまり心に当たらなかつた。ロシアのツァーリやドイツ
のカイザーならまだしも、オーストリアハンガリーの王
子なんて国民から人気がなかつたということくらいは知

識しか持つていなかったのだ。私はアレックに新聞を返した。そして彼のどきどき血管の脈打つ頬をつねると、大人ぶって唇をすぼめてみせた。

「なんだい、こんなくらい。君らはもうすぐ迫ってくる期末試験より異国の雲居の人の死の方が大切らしいね」

「馬鹿だ、この人は！」

友人のなかでもひと際笑いのツボの浅いパーシーというヤツが体を曲げて笑い出した。アレックも一緒になつて言った。

「あのねえロバート。これは立派な専制君主制の瓦解なのさ！ いつまでもかび臭い体制なんか頼りきってるからこうしてポロが出やがった！ これで欧州の連中も民主主義精神の重要さが身に染みたらうよ！ しかしあのプリンツイプツってヤツはすごいねえ。俺たちと大して年も違わないのに皇室に反旗を翻すなんて！」

友人達がそれまで笑っていた顔を収めてしかつめらしく今度は活発な議論を始めた。「思想」「正義」「自由」といった単語が口唇から口唇へと飛び交わされたが、誰かその意味をしっていただろうか。

私は静かに聞いていた。私だつて思想や正義の意味などわからなかった。ただ勢いにまかせて振り上げられるアレックの手が時々私の腰をびしりびしりと打つのに気を取られていた。

そういえば、熱論の合間に友人の中でも一回り年下の子がポツリと漏らしていたっけ。

「オーストリアハンガリーの皇帝様はかわいそうだねえ。奥さんも息子さんもなくしたのに甥っ子さんまで殺されちゃうなんてねえ」

あの子には新聞から何が見えていたんだろうか。血に染まるゾフィー妃の白いドレスとサッシュュだろうか。訃

報を聞き肩を落とす皇帝か、泣き崩れる皇子や皇女だろうか。それとも葬列を尻目に楽しく回り続けるプラーター公園の観覧車だろうか。

父にさんざん暗殺に関する道徳的感想を求められたその日の夕食が済むと、あとはただ暑い日々が続いた。

サラエボの事件の興奮は友人達の白い片頬にほんのちよつとの赤みを残すだけで一先ずは収まった。私達は自転車を乗り回したり、アイスクリームを食べたり、女の子達にちよつかいを出して、激昂した彼女らに自転車で轢き殺されそうになったりしながら過ごした。

本当の始まりは七月二十八日だった。その日は朝寝さえ許されず父にたたき起こされ、新聞を鼻先に突き付けられた。読んでみれば眠気は失せた。

大急ぎでいつもの公園に飛んでいく仲間たちは勢ぞろいしていた。アレックの手元にはとうとう一部の新聞も残らなかった。

「戦争だ！」

アレックが叫んだ。友人たちも続いた。

「ああ、戦争だ！ とうとう始まるんだ！」

「オーストリアのじいさんもやるなあ、九十過ぎでセルビアに宣戦布告だなんて！」

「しかも二国だけの問題じゃあない！ ロシアやドイツまで参戦するらしいぜ！」

「世界戦争になるかもね！ ねえ、アメリカも参戦するかなあ？」

「まさか！」

そう叫んだのはアレックだった。

「アメリカが戦争なんてするもんか！ 殺し合いなんて

蛮行だよ！」

友人達の熱っぽい声はアレックの一言でふつと冷やされてしまった。彼らは次第に声を落とし、話題は段々と欧州の悪口へと移行していった。

私はすっかりがっかりしてしまった。木偶の坊の私だつて初めて身の上に降りかかってきた戦争という出来事に胸躍らなかつたわけではないのだ。それなのに母国に参戦する理由も意志もないとわかると、あれほど大はしやぎしていた自分が大層恥ずかしく思えた。

当のアレックも戦争を蛮行と罵った割には、どこか肩を落とした諦めの表情が浮かんでいた。だれよりも新聞と関わる彼ならアメリカが参戦しないことなど百も承知だろう。それでもきつと、砲弾の飛び交う荒野を剣を片手に駆け抜けていく姿を心のどこかで思い浮かべていたのだ。それは私もみんなも同じだった。

これから俺達アメリカの学生は華々しく活躍する外国の学生を、指を咥えて眺めるだけなのか。

私は前髪をかきあげてアレックの隣にがつくりと腰かけた。友人達も目ずから黙った。アレックは右の手を閉じては開き、野球のバットでできた掌の肉刺をじつと見つめていた。

「結局武器一つも持てないままなのかな……」

彼が先ほどの熱弁とは裏腹に、自らの奥底からふつと浮き上がった言葉をポツリと吐いた。最早彼の中で「野蛮」は「ロマン」へと変貌していたのだ。

私は馬上で勇ましく振られるサーベルに、美しく構える長銃に、轟音と共に敵を散らす大砲に、行き場のない熱く脈打つ思いを馳せた。サーベルを振るのが、銃を構えるのが、導火線に火をつけるのが俺だったらどんなに素敵だろう。

その時、ふと年若い少年の私にある考えが浮かんだ。待てよ、別に武器を自分で使うことに拘ることないんじゃないか？

私はアレックを押しつけて立ち上がると、試験用紙の前じやゴミクズ同然の脳をくるくると働かせた。

そうだ。俺んこの国は中立国だ。つまりどっちの国にもいい顔できる。ということはどこにだって武器やら食料やらを売りつけられる。そこで俺の親父は鉄をたんまり持つてる。そうだ！ その鉄を参戦国にどっさり輸出して武器を作らせればいい！ そうなりや大儲けだ！ 欧州をあげての対戦となりやあ、あっちでは資源が尽きるかもしれないと思ってアメリカを頼りだすはずだ！ やった！ ロバート、これってすごいぞ！ さんざ鉄成金だのバカにされてきた俺達が戦の大黒柱になるんだ！ そうさ、ロバート！ 俺にはできる！

私は友人達にさよならも言わず、公園を勢いよく出て行った。通りを自宅に向かつて夢中で駆けた。

胸がどきどき高鳴った。顔に吹き付ける風で目じりに涙が溜まった。心臓に押し出された高い叫びが、口唇から立ち上った。最早野蛮など空の果てだ。十六の私はただ明るみの中へ無我夢中でひたすらに駆けていた。

玄関口の扉を半ば蹴り破るようにして家の中に突進し、私は父の居る居間へと階段を駆け上っていった。居間に入ろうとすると丁度そこを出ようとしていた女中と激突しそうになった。なんとか彼女を片手で押しのけると、ようやく私は煙草を啜えて書き物をしている父のもとへ辿り着いた。

「戦争ですよ！ 父さん！」

私は山積みになっている紙束を押しつけ、机の上に音高く手を置いた。父は大事な書類をしつたかめつたかに

しやがった盆暗に厭味つたらしく返した。

「ああ、戦争だ。ようやくお前のナメクジ並みの理解も追いついたか」

「そうですね、父さん！ もう、どうしてそんな他人事みたいな顔なさってるんです！ 朝はあんなに驚いて僕を叩き起こしたじゃありませんか！」

「最初は大戦と聞いて驚いたさ。でもうちは参戦しない。どうせ余所様のいざこざだ」

「だからこそですよ！ だからこそできることがありませんよ！」

私は興奮のあまり、腕をぶんぶん振って卓上の書類をほとんど床へ払い落とした。

「父さん！ 戦争には武器が要ります！ 鉄が要ります！ だからうちの鉄をうんと外国に売りつけるんです！ アメリカは中立国だから連合側にも連盟側にも売ることが出来ますよ！ ね、父さん！ この戦争は儲かります！ これは神様がくれたチャンスです！」

父はしばらく盆暗が床に叩き落とされた書類を拾おうと伸ばした腕を空中に留めていた。が、やがて腕を卓上に戻すと、まっすぐに息子の方を見つめた。

「誰の入れ知恵かね？」

私は満面の笑みを浮かべて言った。

「どこぞの盆暗息子ですよ」

父が煙草を放り投げてさも愉快そうに大笑いした。気づくと私の髪は、父の大きく節くれたった手にかき撫でられていた。

開戦は夏の盛りの八月、ぶどうの月の頃だった。セオドア・ローズベルトの言葉を借りれば「ヨーロッパ中に

黒い竜巻が起こった」のだ。

ドイツやイギリスの青年たちは皆競い合って志願し、汽車で前線へと送られていった。彼らは窓から身を乗り出し母親や姉妹や恋人に接吻すると、狭いコンパートメントの中で友達と楽しく歌を歌った。

さて私はと言えば、夏の熱風に押されるように多忙な日々を送った。学校では数学や商学を猛勉強し、それにかけては主席をとれるまでになった。父はよく、夕食後の暖炉のそばに腰かけて私と長いこと話した。そして最後に必ず「お前も何かあれば自由に意見する」といって言うのだった。休日や放課後には、父に取引先との会議や夜会などに連れて行ってもらい、社交のいろはを教わった。

私は語学に長けた移民を積極的に登用するよう、父に進言した。非ワスプの受け入れに父は少し渋ったが、私の長い説得の果てに、最後は満足そうに笑って頷いた。そして移民たちの選抜の責任者を、なんと私に任せてくれたのだ。私は初めての重役に胸を躍らせながら書類に埋もれ、ロシア人、フランス人、ドイツ人、日本人の四名を選抜した。

鉄鋼に乗せた船がニュージャーシーの港を離れ、そして戻ってくるを繰り返すたびに、私の家に使用人が一人、また一人と増えた。売れ行きはどんどん昇っていった。最早私や父の陰口をたたく者はおらず、父も私を盆暗と呼ぶなくなつた。目に見えた手のひら返しはしなかったが、夜云でこっそり私の自慢をしていたのを知っている。母も私の変わりようにすっかりうきうきして、夜なべでさくらんぼのパイを、自らの手で焼いてくれた。

アレック・バルダーソンを始めとした友人達はもう不良めいた遊びをやめ、新聞にばかり齧り付いた。そして

どこまでも続く塹壕から放たれる機関銃の音を思い浮かべるのだった。

明るい日々だった。戦争は私に思いもよらない好機を、両親の信頼を、そして退屈な日々の中に眠っていた荒々しい思いを引き出す鍵をもたらしてくれたのだ。

このまま戦争が続くといいな、と思った。このまま続けばもつとお金が儲かる。父さんも母さんも俺を認めてくれる。退屈な毎日を忘れて勇ましい銃の音を聞いていられる。全く戦争は私の、いや俺の人生の全てをその両腕で支えてくれていた。それがなくなってしまう後のことを俺は考えないようにした。俺はその両腕のなかに、真裸で、ぐったり四肢を弛緩させて横たわっていたのだ。だから誰かが「この戦争は今年、このクリスマスには終わる」というのを聞いた時に、胸がドキリとした。

結局戦争はクリスマスを越した。その頃、中立国であるのに関わらず、アメリカでは段々ドイツへの目が厳しくなっていた。アレックが売る新聞にはドイツ軍の奮行がたびたび載せられた。

ルシタニア号が沈んだのは五月だった。戦争とはなんら関係のないただのイギリスの客船が、ドイツ軍の潜水艦に撃沈させられたのだ。乗船していた百二十八人のアメリカ人が死んだ。

新聞を売りながらアレックは咽び泣いた。友人達も怒り狂った。私はその日のうちに、私が初めて選抜したあのドイツ人の首を切った。

「参戦だ！ それしかない！」

アレックは涙と共に叫んだ。

「くそ！ 蛮族め！ 子供を殺し女を犯す大罪人め！

俺が出向いて撃ち殺してやる！ 弱腰のウィルソンなんかもつどうでもいい！ 参戦だ！ とにかく戦争だ！」

映画は次第に反ドイツ主義のものが増えていった。さるオーストリア出身の名優が、看護婦を犯すドイツ兵の役をしていた。オペラも「フィガロの結婚」や「魔笛」の上演がめつきり減り、ハンバーガーも国民サンドイツチと呼ばれるようになった。私も途中までだったドイツ語の勉強をやめた。

一九一五年のクリスマスも、一九一六年のクリスマスも、兵士たちは塹壕で祝った。戦争の続くまま、気づけば私達は一九歳になっていた。アレックには恋人ができた。私によく似た女の子だった。

そして一九一七年にロシア革命が起き、皇帝や皇后や皇子、皇女達が宮殿を追い出された。専制君主制の打倒にアレックは再び頬を紅潮させていた。

「大戦は民主主義と専制の戦いに純化された！ 今こそ参戦だ！ 世界に俺達の背中をみせてやれ！」

彼はロバート・ランシングの言葉を借りて、毎日私の部屋で叫んでいた。私も彼の熱弁を寝椅子の上でうっとりと聞いた。詩人のアレックは新聞で聞きかじった荒々しい戦記を、ロマンの香水を幾重にも振りかけて私の耳へと吹き込んだ。

「俺達は本当にいい時代に生まれたよねえ」

彼の口癖だった。

「シーザーやナポレオンのようにになれるチャンスがもうそこまで来てるんだよ？ ああ、早く志願したいな。俺、きつとたくさん勲章もらうよ。だって俺、あのアレクサンダー大王と同じ名前なんだぜ？ 活躍しない訳ないさ」

焦がれに焦がれた参戦教書が発表されたのは、四月二日だった。私達は抱き合って喜んだ。アレックの喜びよ

うときたらまあ一段とすく、みんなの前でいきなり私の額に接吻し、

「ああ、こんなに嬉しいことってないよ！ ロバート、君ならわかってくれるよね！」

と、何度も叫んだ。私の方でもやっぱり嬉しくて、みんなと帽子を片手に振り回しながら役所まで駆けて行き、志願手続きを済ませた。

五月、カンザスの訓練場へ送られる兵士が決定された。アレックを始めとした友人達は皆合格した。

だが私だけは不合格だった。

アレックは大変悔しがり、みんなも総出で私を慰めてくれたが、実はという私に心底ほっとしていた。というの、私が勝手に志願登録をしたと聞くや否や母は泡を吹いてぶつ倒れるし、父は涙を浮かべながら、「お前など流れ弾にぶち当たって野垂れ死にするのがオチだ！ 慣れないことは頼むからやめてくれ！」と一晩中怒鳴り散らすで大変だったのだ。これでもし合格なぞしていたら、と考えると頭痛がしてくる。

一か月が過ぎ、アレックたちはカンザスの訓練場からニュージャーシーの港へと移った。

戦地へ向かうのだ。

紙吹雪の降り積もるリヴァイアサン号のタラップの前に、アレックは真新しく重々しい軍服を着て立っていた。遠く汽車に乗って見送りに来た私を彼は大はしやぎで出迎え、支給されたばかりの銃剣や飯盒や鉄兜を見せびらかした。私も彼の勇ましい姿が嬉しくて、彼のポケットにチョコレートやビスケットをこっそり入れてやり、熱い血の流れの透けて見える両頬に深々と接吻した。

波止場の近くに誰かが置いた蓄音機から、勇ましい軍

歌が流れていた。

「さあ、彼方へ！ 彼方へ！ 伝えろ言葉を、彼方へ！ ヤンキーがやって来るぞ！ ヤンキーが来る！ どこへでも戦鼓を鳴らしてやって来る！」

アレックの軍靴が、歌に合わせてタップしていた。軍服が重いのか変な踊りだった。彼は、まだ少年の瞳のまま私の手を取った。

「大丈夫。心配すんな。ドイツやオーストリアの連中を君の国に立ち入らせたりしない。俺がみんなやつつけてきてやる」

そして腰のベルトからナイフを引き抜くと、私のジャケットの袖を三センチほど切り取った。

汽笛が鳴り、アレックは背を向けた。友人達は私の頭を一撫でし、振り向いた肩越しに輝くような微笑を残して去っていった。

船が港を離れ始めた。私は袖の切り取られた腕の上にあげ、夢中で星条旗を振った。

「アレック！ パーシー！ ジェームズ！ ゴードン！ 元気だな！ 帰って来いよ！ 絶対に帰って来いよ！」

アレックが私の袖を何度も振っていた。船が地平線を追い越すまで。

また初夏の暮れがやってきた。私はガランとした学校に行きつつ父の仕事を手伝い、新聞と前線の噂話と、友人から届く手紙を待ち続けた。一週間たったころ、初めてアレックから手紙が届いた。私は大急ぎで髭を剃り、髪を撫でつけ、客間の椅子に座ってそれを読んだ。

「ロバートへ。元気ですか。僕は元気です。船では病気がちよつと流行ったけど、僕やみんなは何とか罹らずに済みました。君にもらったお菓子は、僕より年下の子が

夜に泣いていたので、みんなその子にやってしまいました。僕はお腹いっぱい食べているから心配しないで。今日フランスに着きました。明日、西部戦線に向かいます。君にもらった袖はずつと胸のポケットにあります。アレック」

私はほつと溜息をついて、椅子に腰を沈めた。船で今だかつてない奇病が流行っていると耳に挟み、夜も眠れぬほど心配していたのだ。私はすっかり安堵して、アレックに返事を書いた。

「アレック。君もみんなも元気そうでよかった。とうとう実戦に入るんだね。怯えて逃げ出したりしなきゃいいけど！ どんな時も前を向いて走り続けるのが大事だよ。僕の方まで敵をやっつけてこいよ！ 幸運を祈る！ ところで、僕に結婚話が来ています。お相手はさる石油会社のお嬢さんです。早い話かも知れないけど、僕は結構乗り気ですよ。」

ロバート・クロス

とうとう米軍がマルヌ川に突入したという大見出しが新聞に載った。私はその記事を少女から買った。

「西部戦線の膠着状態はひどいそうだ」
と、父はしきりに足を組み替えながら言った。

「塹壕を掘り進めるだけでまるで埒が明かん。三十分で歩いて行ける道に、どの国も三日かける。それに敵も味方もタンクやら毒ガスやら恐ろしい新兵器を備えて、どの歩兵も進軍ラッパの音にびくびくしているというそうじゃないか」

私は顔中の血管が急激に縮まるのを感じた。

もしアレックやみんなが毒ガスでやられたら……タンクに轢き殺されたら……機関銃に撃たれたらどうしよう……。

あれほどロマンに満ちた戦場が自分の中で、死体のごろごろ転がる荒野に変わり始めた。もし、あの中にアレック達がいたら……。

私の今にも泣きだしそうな顔を見て、父が慌てて付け加えた。

「しかしだな、ロビン！ なにしろ米軍は強い！ それは確かだ！ なあに、アレックだって鬼神のように戦って今頃じゃビールでも開けてるよ！ 心配はいらん！ それにだろロビン、ロバートや、アレックやパーシーを助けるためにはまず私やお前が頑張らなきゃならん。たくさん武器を作ってみんなを助けるんだ。さあ、分かったらよくよするのはおやめ。今日もやるのが山積みなんだぞ！」

結局父の言ったことは正しかった。アレックは鬼神のように戦い、夜はのんびりとビールを呷っていたのだ。私の心配はすっかり杞憂に終わってしまった。アレックの手紙と新聞が、七万の米軍と仏軍によるシャトー・テイエリーでの大勝利を教えてくれたのだ。

「ロバートへ。シャトー・テイエリーの戦いの事を聞きましたか？ あの戦いを指揮したジョン・J・パーシング將軍はすごい方です。いつも冷静で、僕らの灯台のような方だ。僕はジョンビッセル中尉の部隊にいて、マルヌ川の主要橋を爆破する仏軍の援助をしました。僕の機関銃は次々とドイツ兵を撃ち殺し、中尉がとても褒めてくださりました。とうとうドイツ軍が撤退し、僕らは勝ちました。中尉が僕を特別にパーシング將軍に紹介してくださり、將軍と夕食を共にしました。早くおつかさんに会って話したいな、きつとびっくりするだろうなあ。戦場はいい感じですよ。みんなも無事です。勝利はすぐそこです。」

アレック

私はほいっと手紙を放り投げ、両手を打ち鳴らし付けてから笑った。

アレックは毎週手紙を書いては寄越した。どの手紙にも灰だらけの指紋がべったりと着き、火薬のにおいが染み込み時には血液が強張り着いていることもあったが、中身はいつも楽しかった。私は、一度頭に思い浮かべた死体の転がる荒野を、もう思い出さなかった。

「フランスの女の人はみんな優しいです。」

と、書いて寄越してきたこともあった。

「慰安のために町へ出ることがあるんだ。女の子と会うこともできます。彼女たちはすばらしいです。シーツの上でなにも歌わない。僕のことを分かってくれるし、僕も彼女たちのことが分かる。なぜって近くに暮らしているから。フランス語の教科書をもっていけばよかったかも。ねえ、僕たちが一晩中何の話をしたか、今夜はずっと考えてください。」

アレック

話題は尽きることなくあった。こっそり壕の中で真っ白いネズミを一匹、ビスケットをやって育てていること。負傷兵に言い寄られて困っていた看護婦を助けてやったこと。パーシーが足を怪我し、「だめだ！ 切断だ！ おれはもう歩けないんだ！」ときやあぎやあ騒ぎ立てたが、一週間でケロッと完治したこと。

「あの時のパーシーの顔ったら！ 想像できる？ いいえ、してください！ 絶対にして！」

どんな雑誌も新聞も彼の手紙には適わなかった。文体は単調ではあるが、彼が書く方がよっぽど内容は面白く、愉快だった。昔は彼をよく思っていなかった両親も、今では彼の手紙を待ち焦がれていて、届けば楽しそうに回し読むのだった。

「最初は戦況をずいぶん心配したが、私の考えすぎだったかもしれない！」

と、父は手紙を読み終わると決まってそう言った。

夏が熟れ落ち秋も去り、冬がやって来た。私は木枯らしの吹きすさぶ中、冷たい銃を持つアレックをあまり気にならなかった。というのも、父が特別に防寒着やら酒やらを、アレック達の部隊に送ってくれたからだ。

私は十一月二日に届いた彼からの手紙を、寝台の上で眺めていた。文頭には初めて「ミスター・ロバート・クロス」と懇懇に書かれていた。

「ミスター・ロバート・クロス。相変わらず銃を構えて走り続けています。もう戦争にも大分慣れたはずですよ。一度足を前に出すとね、もう横も後ろも見ることなく走っていくんだ。光り輝く前だけを見つめてね。ねえ、ミスター・クロス。面白かったですか？ 私の手紙は。」

アレクサンダー・バルダーソン

私はアレックが詩人だったことをふと思ひ出した。

アレックからの手紙はそれで最後だった。というのもその翌日に戦争が終わり、アメリカ軍の帰還が決定されたからだ。

ニュージャージーの港は人と音楽と花に溢れていた。

嬉しい人に乗せた船が港に着くと、黒人兵の奏でる楽しい音楽が陸に流れ出た。タラップが倒され、復員兵が津波となって押し寄せた。私はトレンチコートにすっぽり埋もれた懐かしい友人達を目早く見つけ、駆け寄って順々に抱きしめた。

「パーシー！ ジェームズ！ ゴードン！ お帰り！」

本当にお帰り！」

ふっと私の両目に荒れた掌が被せられ、背後である鈴の笑い声が聞こえた。

「アレック！」

アレック・バルダーソンは煤で黒く汚れた顔に白い歯を浮かべて立っていた。あの時と変わらない姿のまま。

「アレック！ ああ、アレック！ お帰り！」

抱きしめると火薬の匂いが彼から香った。そしてその奥に、ひっそりと日向の香りも漂った。

友人達はそのまま私の家に寄り、夕食をご馳走になった。父はしきりに戦地での活躍を聞かせてくれ、とせがんだ。

「こうなんです、おじさん！ 敵がこう、こう近づいてくるでしょ？ でも俺はまだ引き金を引かないんだ。まだだ、まだだ……もう少し……今だ！ ドカン！」

アレックが手真似をすると、パーシーがわざとらしく椅子からどっと倒れた。私達は愉快に大笑した。母までもウキウキして、「さあさ、皆さん！ 戦地でアイスクリームは召し上がられて？ ここにどっさりありますよ！ どうぞ、どうぞ！」と、張り切って自ら給仕をした。デザートに飽きると父母は寝室に引き上げ、友人は玉突きをしに遊戯室へ行き、私とアレックは煙草を吸いにベランダに出た。

星々が彼の無事を祝うように、満天に煌めいていた。

私達は何も言わず、黙って煙草を楽しんだ。一本目が吸い殻になり、二本目に差し掛かったところで、アレックがふとポケットを弄り、中から布切れを出した。

「君の袖だよ。ありがと。世話になった」
そう言って私に渡した。

「持ってたらしい」

「いいんだ。俺が勝手に持つてつちまつたんだもの」

そしてアレックは眠たそうに欠伸をした。ブルネットの髪を蓄えた頭を、私の肩口の辺りに傾けた。

「シシーに別れの手紙を出したんだ」

私は彼の、私によく似ている恋人の事を思い出した。

驚いて、なんだってそんなことを！ せっかく無事に帰ってきたのにあんまり惜しいじゃないか！ と言おうとしたが、はつと私はある考えに行き着いた。

「なるほど！ さてはお前、戦争中にどこぞのパリ娘に恋でもしたな！」

アレックの大きな瞳が見るうちに見開かれた。はあ、なるほど、凶星だな。私の確信を裏付けるように、彼はたちまち大笑いして私の肩を何度も叩いた。彼はなかなか笑いやまなかつた。私までもおかしなツボに入ってしまった。二人でひとしきり大笑いした後、アレックは友人達と酔いの回った声で調子はずれな歌を歌いながら帰っていった。

そしてその夜のうちに、アレックは自殺した。

愛する私の息子よ、何故お前にこんな話をしたのか、わかるかね？

冬の木立の下の墓の前に、私は立ち尽くしていた。涙も流さず、目と口をぼかんと開け、両腕を胸の前にならりと突き出して。